

### 36. 一酸化炭素中毒のMRI所見 (CTとの比較)

林 克二

(九州労災病院高圧医療部)

【目的】一酸化炭素中毒 (以下CO中毒) の, CT に関しては, すでに多数の報告があるが, MRI に関する報告は少ない。今回, CO中毒の3例にMRIを行い, CT所見と比較し, 興味ある結果を得たので, 報告する。

【対象と方法】症例は3例で, 2例は急性CO中毒, 1例は間歇型である。急性CO中毒の1例は重症でOHP後も症状の改善はなく, 植物状態のまま経過した。1例は軽症で, 初回のOHPで意識は回復, 後遺症を残す事なく完治した。間歇型の1例は, 発生後, 4ヶ月を経過, OHP及びリハビリテーションを行った。これら3例に対しOHP前後に, CT及びMRIを撮り, 比較した。

【結果】重症のCO中毒例では, CT, MRIとも, 淡蒼球に変化を認め, 長期のOHP後, 白質の病変の出現が, CT, MRI共に認められた。軽症例では, CT上, 異常は認められなかったが, MRIでは, T<sub>2</sub>イメージで, 両側淡蒼球に, high intensityを認め, OHP後, 改善を認めた。

間歇型の1例では, CT上, 両側淡蒼球, 白質にLDAを認めた。MRIでは, T<sub>2</sub>イメージで, 白質, 淡蒼球にhigh intensityを認めた。OHP後, 臨床症状は軽度の改善を認めたが, CTでは, 白質, 淡蒼球のLDAは不変, MRIでは, 白質のintensityの低下を認めた。

CO中毒のMRI所見については, まだ未解明の点も多いが, CTに比して, 淡蒼球の病変に関しては, 精度が高く, 又, 間歇型の治療効果の判定にも, 有効である事が想定された。文献的考察も含めて, CO中毒のMRI所見について報告する。

### 37. CK異常値を示した急性一酸化炭素中毒

上條順子\*<sup>1)</sup> 上條裕朗\*<sup>2)</sup> 英崎和弘\*<sup>3)</sup>

* <sup>1)</sup>	上條記念病院内科
* <sup>2)</sup>	同 脳神経外科
* <sup>3)</sup>	同 外科

急性一酸化炭素中毒に罹患後, 突然進行性の精神神経障害が出現する間歇型一酸化炭素中毒は難治性で, 移行への可能性を予知することは全く不可能で, その診断と治療に困窮することが度々である。そこで関連する指標がないかを調べた。昭和60年11月より平成元年2月の間当院に入院し, 高気圧酸素治療を受けた急性一酸化炭素中毒22例を対象にCK (Rosalki変法), CKアイソザイム (電気泳動法), 白血球数, GOT, GPT, LDH, Amylaseを計測した。経過は間歇型が4例, 単峰性が18例で, 予後は完全回復が21例, 後遺障害を残したものは1例で, パーキンソン症状を呈し, 次のような結果を得た。

(1) 急性一酸化炭素中毒18/22例で血清CK上昇, 20/22例で白血球増多を認めた。

(2) 血清CK値と年齢, 中毒の原因, 入院時意識レベル, 経過予後とは有意な相関を認めなかった。

(3) CKアイソザイムはMM型で, 骨格筋由来と考えられ, 骨格筋の浮腫や圧迫は否定的で, 骨格筋の低酸素に対する脆弱性原因であると考えられるが, 脳の脆弱性とは相関しない。

(4) 血清CK値と血中ミオグロビン濃度と血清LDHとは有意に相関した。

(5) 間歇型移行例4例は有意ではなかったが, 血清CKは異常高値を示し, 意識レベル再低下, 精神神経症状が発現した移行時には血清CKの有意な上昇は認めなかった。

(6) 血清CKが入院時から異常高値 (正常値の9倍以上)を示す症例は, 間歇型に移行する可能性が高いことを見いだした。

(7) 急性一酸化炭素中毒の高気圧酸素療法は十分に行う必要がある。